
S.I.C. -the System of Isolation for C.

相羽わをん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S. I. C. — the System of Isolati
on for C.

【Nコード】

N4492X

【作者名】

相羽わをん

【あらすじ】

建国の王カルロスI世が没してから数百年後、記憶喪失の少女と、玉座を目指した少年が出会うとき……世界の歴史はヒズミだす……！
国宝級魔法使いと宮廷医師団員の兄弟、そして我欲（？）の強すぎる女性執事などに関わりながら、2人が目指すのは？？。

中世ヨーロッパ風異世界を舞台に、少女リアを追った話題作！
に、なる予定！

あの夜

ある半月の夜。

暗い部屋の中で、暖炉の火だけがごうごうと燃えている。少女は暖炉の前に立っていた。お忍びで城下へ出かけた時の町娘の服を着て、手には病床の祖父に宛てた手紙。斜めがけにした袋には、食料と水、宝石箱。

王の孫娘というだけで手にする事ができた、貴重な書物や、自分好みの服、職人が丹誠込めて作った靴、絵画……ああ、全てを置いて逃げる時が来たのだ。

少女は息を吐いた。

少し惜しい気はした。しかし、それは生きて喜びを感じられるならこそ、惜しむべき。命の糧を得る時に売ればいい……そう思って装飾性のない宝石ばかりを集めてくれた。

ただ、祖父が少女のためにあつらえたティアラだけは、売るためでなく、形見として持つて行くつもりであった。ティアラの正面の宝石は、父と母の形見。母は幼い頃亡くなり、祖父の親友であった父は行方知れずだという。

「おじい様」

少女は手紙を見つめた。

祖父に直に渡したくて、部屋を尋ねたが、いつも大叔父の差し向けた衛兵に阻まれて渡せずじまいだった。

これは不正の証拠。

不正どころではない。大犯罪の証拠。

防がなくては。

多くの人々のために。

私たちは、命をかける。

生きるにせよ、死ぬにせよ。

「俺だ、入るぞ」

焦茶のマントを羽織った、それでも分かる程に筋骨たくましい青年が入ってきた。

「メル兄様」

「もう時間がない、荷物はまとめたか」

「もちろん」

「すぐに出るぞ、行き先はヘリムの砦だ」

青年は暖炉の隣の隠し扉を開けた。厩近くの倉庫へ繋がっている。

「俺が先に行く」

青年は扉の奥へ入っていた。

「ちゃんとして行くわ」

少女は返事をしたが、手の中の手紙を強く握り、暖炉へ投げ入れた。そして、隠し扉をくぐり、扉を閉めた。

部屋の中は、ごうごうという音ばかりが聞こえる。

炎の中の手紙は、ちりちりと音を立てたが、一向に燃えない。燃えないどころか、すべるように暖炉を飛び出し、花瓶を倒して水と花をぶちまけた。あえてびしょびしょに濡れながら手紙は本棚へ向かい、ぴたりと静止した。

本棚から1冊の分厚い本がふわりと空中に飛び出し、ぱらぱらとページがめくられ、手紙はページとページの隙間に滑り込んだ。本は再び本棚へ戻り、何事もなかったかのように暖炉の炎は燃え続けた。

病床の王と対立する王弟にして、彼女の大叔父たるジュベール公の怒号と罵声が城に響き渡ったのは、暖炉の火が消えた後の事であった。

記憶喪失少女リア

リアは街の噴水に腰掛け、辺りをきよろきよろしていた。街は噴水を中心に作られていて、周りの建物は真っ白なしっくいで作られている。沢山の宿屋、レストラン、喫茶店、布屋に服屋、装飾品やお菓子の露店。カラフルな屋根に、旗や置物や花が飾られて、目にも楽しい。人々も多くが笑顔で、街は活気がある。

街に住んでいるらしい少女が、リアを一瞥して、恋人らしい青年のところへ掛けて行った。少女の低めのヒールが石畳にぶつかって軽やかな音を立て、かわいらしいリボンで結われたポニーテールが揺れる。

街ってにぎやかだ、とリアは思った。

リアもまた、相方を待っていた。恋人ではないけれど。

「お待たせ！ 結構高く買ってもらえたよ」

手を振りながら、人の良い笑顔で駆けてくる青年。村長の孫のハリスだ。村長そっくりの縮れた黒髪に、茶色の目。村のおばさん方に大人気。優しくて力持ち、ただしちょっと頭が悪い。

「問屋のおやじが、くれたんだ」

「ありがとう」

手渡されたのは三角形の揚げ菓子だ。

「一休みしたら薬屋に行こう。そのあと荷馬車を引き取って、村へ帰ろう」

「うん」

私はハリスが問屋に行っている間、ずっと休んでいたんだけど…一人で薬屋に行くのは、ちょっと怖いし。リアはそう思い、揚げ菓子をかじった。カリカリふわふわした皮の中から、蜂蜜とチーズのクリームがとろりと出てきた。ハーブの香りもする。

「うん、おいしい。あ、リアの方はチーズだ」

「ハリスのは違うの？」

「俺のは芋と魚。いる？」

「ううん、いいよ」

街って贅沢だなあといいながら食べていると、目の前の役所から人がわらわらと出てきた。ロープを張って、なんだか物々しい。

「君たち、危ないからあっちへ行っていなさい」

はげ頭でちよびひげのおっさんが、茶色いニットベストを着て、汗を拭きながらリア達の方へ走ってきた。

「分かりました。行こう、リア」

「うん」

2人で花屋の前まで移ると、役所の人が警笛を拭き始めた。白と赤の旗も振ってる。ごうん、ごうん、という音がして、空から、ゆっくりと何かが降りてきた。

「すごい、飛行艇だ。俺、初めて見た」

ハリスが揚げ菓子の入っていた袋をぐしゃぐしゃといじった。

「きっと貴族身分の人だ。なんだろう、視察かな」

リアはハリスの言葉がほとんど聞こえていなかった。降りてきた人と、目が合ってしまったからだ。

光を吸い込んでいるようなその人。金の髪、青い：ちがう、紫色？この色を、雰囲気を知っている気がする。

「マグニフィセント」

リアは知らぬうちに呟いていた。

その人は驚いたような表情をして、役人に何事か告げると、ふつと微笑んだ。

役所の応接室で、その人はくつろいでいた。

茶色のベストのおっさんに「くれぐれも失礼のないように」と言われ、すっかり緊張したハリスとリアは、椅子に慎重に腰掛けた。

「どうも、はじめまして。僕はアリー。君は？」

ソファに寝転んだまま、その人は言った。ハリスは息を勢いよく吸って、むせた。

「すみません、失礼しました。ハリスと、リアです」

「はじめまして」

リアがお辞儀すると、アリーは起き上がった。

「このソファは固くて、お昼寝向きじゃないね。さて、君、自己紹介して」

「は、はい！ 自分はここから更に東にあるココ村出身で、この街へは村でとれた野菜とか果物とかの加工品を売りにきました。明日の朝街を発つ予定です。えっと、自分は村長の孫で、村の商品を売りにくる役です」

「ふーん、リアちゃんは？」

「リアは、半年くらい前から村に住んでいます」

リアの代わりにハリスが喋った。

「春祭の最中に、空から池に落ちてきたんです。本当です。出身地も家族もほとんど覚えていないので、子どものいない、鳥だけが家族みたいなのはあさんの家で一緒に暮らしてるんです」

「そっかー。大変だったね、リアちゃん」

「村の皆さんが優しいのでそれほどでは」

リアは素直に言った。

「リアちゃん、覚えている人の名前、教えてもらってもいいかな？」
リアは息を吸って、天井を見た。

「名前は覚えてないんですが、両親は亡くなって、祖父と暮してて、兄が3人いたと思います」

「あの、アリー様は、貴族身分ですか」

ハリスが身を乗り出した。

「そうだよ？」

興味なさそうにアリーが返事をしたが、ハリスは続けた。

「実は、リアが落ちてきた時に下げていた鞆に、宝石箱が入っていました。その中に、沢山の宝石と、お姫様がつけるような髪飾りが入っていて……」

「それは村にあるの？」

「それが……村に泊まった旅人が持ち去ってしまったんです」

「あーそう。残念だなあ。でもまあいいや」

アリーは立ち上がった。

「パリス」

「パリスです」

「失礼。パリス、僕の弟がイストベルクで医者をしているんだ。記憶喪失の患者も引き受けているから、リアちゃんに弟の治療を受けてみてほしい。弟は魔法医なんだ。どうかな、リアちゃん？」

笑顔で、リアを振り向くアリー。

「治療費を払えるだけの財を、持っていない。村の方にも迷惑はかけたくないんです」

リアは深刻に思った。魔法医なんて、とんでもなく高額な治療費を請求してきそう。

「大丈夫、僕が持つから。困った人を助けるのも、貴族の使命なんだよ」

「……」

「じゃあ、お手伝いをして、それで払うって言うのは？ イストベルクは知ってるよね？ 大都市だから、賃金も高い」

「すごい！ リア、行ってきなよ。きっと、家族も心配してる。記憶を取り戻して、会いに行ったほうがいい」

パリスはリアの手を握って、目を見て言った。家族4世代が暮らす家に育ったパリスは、家族の温かさはかけがえのないものだと思っていた。

リアははつきりと感じた。温かく優しいパリスなら、きっと、子どもはいない、あのおばあさんの面倒も見ってくれる。村の人たちも、皆いい人だし。

「……じゃあ、おばあさんのこと、お願いします」

「おう、まかせてくれよ」

リアはパリスの手を握り返した。

「じゃあ、そう言う訳で僕とリアちゃんはイストベルクに行きます。」

ここの裁判については後任者をよこすねー。じゃ、パリス」

「ハリスです」

「あーもー僕だめだね。あははー。で、ハリス、君のことは村まで僕の飛行艇で送るよ。ついでに、村へ僕のうちから農耕馬と農機具を少し、あと、若手を何人か派遣するよ。君の村の農産品は人気があるけど、若い人足りないみたいだし。できれば、僕のうちに、君のところで作ってる果物が届くようにしたいからさー」

アリーは早口で一方的に言うのと、立ち上がってハリスに握手を求めた。

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、早速出発しよう！」

そして、リアは初めての飛行艇で初めての乗り物酔いに苦しむのだった。

執事アドラー

広い部屋は白を基調に、ピンクと緑とオレンジで彩られていた。大きなベッドは天蓋付で、ガラスの扉がついた本棚や、ティーセットの飾られたキャビネット、白い机と椅子には金細工。バスルームは全面鏡張りで、バスタブは猫足だった。

くう…

昨日の夜に見せられたのを思い出しているうちに、リアのお腹が情けない音を立てた。もうこれ以上は鳴けない、というように。

リアは目を開けて、いつもの部屋でない事を改めて実感した。今までの数倍やわらかいベッドの上で布団にくるまっていたかっただけれど、さすがに、起きなければ。

顔を洗って、クロゼットの中から適当なものを見つけて着てみた。

モスグリーンのベーシックなワンピース。

まあまあかな。

鏡の前で思った時、コンコン、と扉がノックされた。

「失礼致します。おはようございます。アドラーでございます」

入ってきた執事は、リアを見て息をのみ、天井を仰いで眼鏡……いや、目頭を押さえた。

「完ッ壁！！」

どうやら、リアはアドラーの予想を裏切る服を選択し、かつ予想以上にアドラー好みの少女に見えたらしい。

「わたくしはリア様ならこちらのようなお召し物と思っておりました」

アドラーが手で示したのは装飾の多いごてつとした古めかしいドレス。

「ああ素晴らしい、何て素晴らしい少女を連れてきてくださったん

でしょう！ 奇跡！」

アドラーは長い栗色の髪を振り乱し、自分が推薦するドレスを抱きしめて悶えている。長身で美人、メリハリのある体型のうえ、燕尾服も美しく着こなしているのに。

「あの、朝ご飯は……」

遠慮がちに尋ねると、アドラーは眼鏡を直しながら答えた。

「ただ今ご案内します。朝食は大食堂で食べるようになっておりますから」

アドラーは重々しい扉を片手で開けた。

「本日のメインはオムレットですよ」

卵料理は、村ではごちそうだった。

「楽しみです」

リアが言うと、アドラーは嬉しそうに微笑んだ。

ふわふわの絨毯を踏み踏み廊下を歩む。壁紙も繊細な花のパターン、天井まで絵が描かれ、所々に大きな花瓶に花が飾られている。大きな窓からレースのカーテン越しに朝日が差し込み、飾られた絵画がぼんやりと見える。これは泉の妖精と花の妖精の対話が描かれている。さっきのはユニコーン。

素敵な絵が沢山ある、とリアは思った。

廊下を右へ右へと行くと、大きな扉に突き当たった。ガラス張りで、レースのカーテンがかかっている。

「失礼致します。リア様をお連れしました」

アドラーが言うと、中からどうぞという声が聞こえた。内側から扉が開いた。

中は天井が高く、様々な植物が根を張っていた。植木鉢ではなく、地面から。大きく長いテーブルと椅子を置くスペースだけは、モザイクタイルが敷かれていた。

「おはようございます」

リアが挨拶すると、テーブルについていた2人が立ち上がった。メインの席にいるのは30歳くらいの男の人で、金の髪に緑の瞳

だった。 7歳くらいの少年がどこかで見覚えのある、金髪と青い瞳。

「おはよう、リアちゃん」と少年。

「アリーから聞いてるよ。自己紹介するね。ぼくはアリスティド。アリスって呼んでいいからね！」

にっこりと笑う少年は、天使みたいに可愛らしかった。水色のブラウスに、白いタイ、キュロット風のパンツは紺地に金のストライプ。

「こっちはクロード」

緑の目を伏せながら、軽く会釈した。長身で、面長、ぴしっと分けられた前髪、物静かな雰囲気。アリスティドと少し似ている気がする。白いシャツに黒いパンツ、装飾も何もなくシンプルだ。

「この屋敷はクロードの病院の一部なんだ。後で診察してもらってね！」

「よろしくおねがいます」

「じゃ、朝ご飯食べちゃおう」

二人が座ったので、リアも慌てて席に着いた。

「いつも朝食は軽めなんだ。今日はスープと」

「ニンジンとカブのコンソメ仕立て、フラワーサラダ、マロンのドレッシング、シャンピニオンオムレット、パプリカクリーム、ベGETトパン、スウィートパンプキンです」

アドラーが銀のトレイでリアの分を運んできた。ニンジンとカブのスープだ。

「美味しそう」

リアは手を合わせた。

「いただきます」

アリスティドとクロードは顔を見合わせ、笑顔で、リアと同じように手を合わせた。

「「いただきます」」

朝食は、リアのいた村の話でおいに盛り上がった。

診察室はアイボリーで統一されていた。季節の花が沢山飾られている。部屋の中央、一段高くなったところに、クッションがいくつか置かれている。その台自体も柔らかいようだ。

「あれが椅子だ。座って待っててくれ」

クロードは白衣を着ると、板に紙を置き、クリップで固定した。鉛筆でさらさらと何か書いている。リアの方はほとんど見ない。

無愛想な人だ、とリアは思った。リアが座ると、クロードはその隣に、少し間をあけて座った。

「名前と年齢、好きな食べ物を教えてくれ」

「ファミリィネームは覚えてません。名前はリア。多分16歳。好きな食べ物は栗のコンフィチュール」

「どうしてそれが好きなんだ？」

「甘くて、美味しいから。一緒に住んでいたおばあさんが、名人なんです」

「今度この屋敷にも届けてもらうようにしよう。楽しみだ」

クロードは少しだけ、笑顔になった。ほんの、少しだけ。

「それでは、これから検査を始める」

少し緩んだリアの気持ちだが、また一気に緊張した。

「アドラー」

「なんですか」

食堂で、のんびり食後のお茶を飲んでいるアリスティド。そしてクロスを外したテーブルを拭いているアドラー。

「リアちゃん可愛いでしょ？」

「ええ。本当に可愛い。可愛すぎてもう、動悸が止まりませんよ」

「リアちゃんの今朝の服アドラーの趣味じゃないよね？ アドラーなら重たい生地フリルたくさんドレスとか、白いワンピース着せそうだもん」

「本当は着せたかったですよ！ でもわたくしが行く前に着終わっ

ていらしたので……」

「ぼくなら巷で話題のアニマルファッションをさせたいな―蛇とか！」

「リア様は何でも似合いますけど、遊びが過ぎると大変ですよ、特にフォローが」

「そうだねー」

「リア様は大事になさってください。今まであなたが見つける事ができなかった珍品ですよ」

「物みたいに言うなよアドラー。君じゃないんだから」

アリスティドは自分のティーカップに自分でお茶を足した。お茶の滴がはねて、テーブルが汚れた。

「わたくしだって大事にしてください。わたくしは弱く儂いのですよ。瞳は宝石、髪は絹、肌は白磁。ぶたれたら終わりです」

「それで、君の機嫌を損ねた人は末代まで呪われるんでしょ？」

「末代までですめば、幸運ですよ」

アドラーははねたお茶を拭き取りながら、形のよいの唇で微笑んだ。

執事アドラー（後書き）

好きなキャラクターです、アドラー女史（準レギュラー）。レギュラーメンバーを差し置いて、堂々と第2話目のタイトルを奪取しました。

あに？

正午、食堂に現れたリアは、カチューシャを着けていた。目立たない黒いカチューシャだ。

「あっ、カチューシャ」

既に席に座っていたアリスティドが目を輝かせた。リアは頭を気にしながら恥ずかしそうに座った。

「アリス君、目がいいんだね。頭の中の活動を調べる装置らしいの」
このカチューシャはさつきクロードに装着された装置だ。なんでも、頭の中がどういう時にどういう働き方をするか記録できるらしい。

リアにはどういう物だかさっぱり分からないけど。

「あーだから黒なんだ。ぼくは赤とかピンクとかオレンジとかがいと思うなー」

「女の子っぽいのは、あまり得意じゃなくて」

どちらかというと、スカートよりもパンツが好きなんです……と
リアは言いたかった。

「そっかーじゃあ、刺繍は？ 金糸で刺繍してあるのとか。医療用でもせっかくだからさー」

クロードが朝と同じ格好で入ってきた。黒いパンツに白いシャツ。
「兄さん、勝手にいじらないでくださいよ」

「えーいいじゃーん少し位」

「…おにいさん？」

クロードが、がたんと椅子に座った。

「そう言えば今朝、年齢は言ってなかったな……」

「そうだったねえ？」

アリスティドが両手でほおづえをついて、リアを見た。

「もう一度、自己紹介しまっす！ はい、クロードから」

「クロードⅡレムⅡヴィズィオネル。今年で多分26歳」

え、ええええ!!

嘘だ30代でしょう!!!!!!

「ぼくはアリスティド・リユー・ヴィズィオネル。好きな物はお菓子と紅茶と蜂蜜! 今年で多分30歳でーす」

こらこらこらこら、嘘はよくない!

「え、その、冗談……」

「それがね、冗談じゃないですよ」

グラスに水を注ぎながらアドラーがため息をついた。

「この性悪な館の主は人を騙くらかしてからかうのが大好きなんですけど、これだけは本当なんですよ。もうそろそろオトナになってほしいんですが、本人がお子様の格好が大好きで大好きで、ちょっと趣味が危ないかなって言うところもあるんですけど、まあ館の主ですから誰も文句も言えず……」

「世を忍ぶ仮の姿なの! これは!」

7歳児がばんばんとテーブルを叩く。頬が赤くて可愛い。

「お嫁さんもらわないで悠々自適な独身貴族を貫かんとしているのに、まーイロゴトに頭がイッちゃってるおっさんたちが、はた迷惑な縁談ばーっかり持ってくるんだよ! それが鬱陶しいからこういう感じで過ごしてるの! このぼくの苦悩がわからないかな!？」

ぼくは健全! 健康な男子です!」

アリスティドは言い切って、豪華な彫刻の柔らかな椅子にふんぞり返った。

そんなこと、こんなに可愛らしい男の子に言ってほしくない…。

リアはちょっと切なく思った。外見が可愛くても、中身が伴わないと残念な印象を人に与えてしまうものなのね……。

「自分は何もしていないが、兄さんが子どもに見えるのは、魔法で姿を若くしているせいなんだ」

クロードが水を一口飲んで言った。

「自分も、兄さんも、この国では高位の魔法使いだ。政治的な地位がそれなりにあって、魔力も相当強い。特に兄さんは、この国で一

番魔力が強い」

「そうそう」

アリスティドが頷く。

「兄さんの目の色は独特な色をしているだろう？ マグニフィセントという血筋の証拠で、この色はマグニフィセントブルーとも呼ばれる。これは男にのみ継承されると言われている」

「マグニフィセントって、聞いた事だけありましたけど……」

「そうか、一般人には国宝級魔法使いという呼び方の方が馴染んでいるから、リアは魔法に縁のある家の育ちなんだな」

クロードはどこからか取り出した手帳に、ペンでさらさらと書き付けていた。

昼食を食べ終わった頃、アドラーが思い出したように言った。

「そう言えば、昼食中にリア様の荷物が届きましたので、リア様のお部屋に運んでおきました。なんでも、同居なさった方が急に亡くなって、その方の遺品も一緒に入っているとか」

「えっ」

おばあさんが、亡くなった!？

「葬儀は今日の昼過ぎからですので間に合いませんが、一応お悔やみの手紙は定型通りお渡ししておきましたよ」

「あ…ありがとうございます」

「重ねてお手紙を出すようでしたら、わたくしが手続き致しますので」

アドラーが優しく微笑んだ。

「ありがとうございます」

リアは、アドラーの心遣いに心底感謝した。そして、昼食後の時間は届いた荷物の整理にあてる事に決めた。

挨拶をして食堂を出ると、植物のある清々しさや甘い香りは一切しなくなった。かわりに、しんと静まり返った屋敷の広さが、廊下の向こうから迫ってくるようだった。

記憶を辿って、部屋へ向かう。朝は右へ右へと来た。だから、今度は左へ左へまがって行けばいい。リアはドキドキしながら、柔らかな絨毯の上を歩き始めた。

ここだ、と思って開けた扉の先は、荒れ果てた部屋だった。閉め切られたカーテンは裂け、壁の絵は落ち、椅子は放り出されて足が折れ、机はひっくり返り、花瓶は割れ、花は干涸び、酸っぱくて臭い、妙な臭いが充満していたので、リアはすぐに扉を閉めた。

ところが、部屋の中から聞いた事のある声が聞こえた。

「リーアッ！」

リアを呼ぶ声。村でおばあさんが飼っていた鳥と同じ声。

「ピピ？」

「リーアッ！ ダーシーテッ！」

リアは再び扉を開けて、異臭の中を突き進み、カーテンを開けた。細かい埃が立ち昇り、光をわずかに遮る。

ベッド脇に落ちていいるいびつな形の鳥かごの中に、見知った白い鳥がいた。尾は長く、くちばしは黄色く、目は黒、目元に薄紅色、黒い脚に、エメラルドグリーンの爪。おばあさんは何て言う鳥なのか分からないのよねえ、と言っていた。

白い鳥は歪んだかごの中を飛び移りながら、ハヤクハヤクと急かした。しかし、どうしてか、かごにの出入り口が開かない。仕方ないのでそのまま持ち出すことにした。

「ピピ、どうしてここにいるの」

「リア、ダーイスキ！」

「ねえ」

「ツカマッタ！」

ピピはカッカッと鳴いて、リアの後ろを見つめた。振り返ると、黒い何かが後ろに立っていた。

あに？
(後書き)

アリスなのに男の子。まあよくあることです。

おとうと。

黒いマント、黒いローブ、ぼさぼさと伸びた黒い髪、黒い瞳、目の下の隈、不満そうなへの字の口、そしてツンとする臭い。部屋があまり明るくないので男とも女とも分らないが、身長はアドラーと同じくらいだろう。

リアは鳥かごを抱えて立ち上がった。

「この鳥、私の恩人の鳥なの。鳴き声が聞こえたから勝手に入ってしまったんだけど、すぐに出るから」

リアはその人物の横をすり抜けようとした。しかし、その人物は鳥かごをがしつと掴んで通さなかった。

「この鳥は魔鳥だ」

男の声だった。

「魔鳥は素人が愛玩動物として飼うわけにはいかない凶暴な生き物だ。それに、この魔鳥を使う事で、世界が救われる。ここに置いて行け」

「この子はもともと農村のおばあさんが飼ってたの。全然凶暴じゃないし、むしろ賢いくらいよ。変な冗談はやめて」

「洗脳されているな……」

「あなたこそ洗脳されてるんじゃない？」

「俺はなんともない！」

怒鳴られた。リアはむっとした。

「手を放せ」

「いやよ」

「放せ！」

「嫌！」

男の目の色が変わった気がした。リアは男を睨みつけたまま、思いつき、男の足をかかどで踏みつけた。

「っ!？」

リアはかごを奪い取って走り出した。廊下へ出ると空気がはつきりと違う。ああ臭かった。

「待て！」

振り返ると、男が追いかけてくる。やばいやばいやばい。そうだ、食堂へ行けばアドラーがいるはずだ。アドラーならなんとかしてくれるはず！

リアは曲がり角を右へ、右へ、右へと曲がった。

ヒールに高さのある靴でしかも柔らかい絨毯は走りにくく、鳥かごを抱えているためリアの足は普段より随分遅かった。服にあわなくても村から履いてきたブーツにすればよかったと後悔した。

ガラスの扉が見えた、と思ったとき。

ぐつと足が上がりなくなり、バランスを崩して、リアはうつ伏せに転んだ。顔をあげたとき、鳥かごがガラスの扉の手前に落ちたのが見えた。ピピが暴れている。起き上がろうとするとなんだか腰とお腹の辺りが重い。振り返ると黒いローブを着た金髪の男が、リアのスカートを握りしめていた。

「うつわぁ！ アドラー大変だよ！」

ガラスの扉の向こう、食堂からアリスティドが顔を出していた。

「リアちゃんがギルに襲われてる！」

「なんですって！ あのろくでなし！」

アドラーが鳥かごを蹴っ飛ばして走ってきた。男は荒い息をしていて、もう動けないといった表情をしていたが、一瞬後には白目をむいていた。

「わたくしの可愛いリア様にー！！」

と、言っただけでアドラーが男にバックチョークをかけていたのだ。男の喉を締め上げているアドラーの腕が意外と筋肉質だ。

「大丈夫？」

アリスティドがクッキーを食べながらリアを覗き込んでいた。

「うん、怪我はしてないから……」

リアが立ち上がると、アリスティドがリアの足下を見て、「あ
り」と言った。

「走りやすい靴を用意しておくね」

リアは、そう言えばこの人は自分より年上だった、と思い出した。
「……あ、ありがとう」

男はほどなくしてぐったりしたので、アドラーが手際よく縄で縛
り上げ、食堂に運んで植えてある巨木に縛り付けた。

「リア様もとんだ災難でしたわね」

「ほんとにさ！ この家に来て2日目でギルに会うなんて」

この縛り上げられた人物はギルというらしい。ギルは金髪が脂で
べたべたと張り付いており、血色も悪い。

「さっき、黒目黒髪の男の人と会ったんですけど……このギルって
人と同じような格好をした……」

アリスティドとアドラーが顔を見合わせた。2人で肩をすくめ
ると、アリスティドはリアの手を引いて、さっきリアが昼食を食べた
席に座らせた。アドラーが紅茶の入ったティーカップをさっとテ
ーブルに置いた。テーブルにはクロスが掛けられていなかった。

「説明不足でごめんね、リアちゃん」

アリスティドは自分の席に座って紅茶を一口飲んだ。

「あれはギルバートって言って、ぼくらの一番下の弟なんだ。髪と
目の色が気に入らないらしくて、魔法で黒目黒髪に一時的に変えて
るみたい」

「魔法って、そんな事もできるの」

アリスティドは勿論、と言った。

「ぼくだって、見た目はリアちゃんより下でしょ？」

「あ、そっか」

「そう、同じ事。そんでね、魔法がとけると元に戻るんだよ。単純
な魔法だと、怒ったり、泣いたり、気絶したりすると、魔法がとけ
ちゃう。……あと、ギルの場合、あの部屋からでると魔法が無効に
なるんだ」

「へえ……」

「今、ギルは魔力が封じられているから、その封じの魔法を弱める魔法を部屋に施してるんだと思う」

「へえ……」

なんだか面倒くさい弟さんだなあ、とリアは思った。

リアのこの半年の生活では、魔法というものが不要だったからだ。村では、祭の時にともされる灯りが魔法で作られたものだった。りするだけで、生活する上ではとお目にかからなかった。

「魔法って色々できるんだね」

リアが言うと、アリスティドはそうそう、と頷いた。

「万能じゃないけど、仕組みを理解すれば色々な応用が考えられるからね。便利だよー」

アリスティドは両手を広げると、右手に炎、左手に氷を作り出した。一瞬でだ。

「わっ」

「これは初歩。この二つを合わせるとね」

手の平を平行に構え、ゆっくり近づけると、鋭い破裂音がして、周りにもやができた。

「温度差で水蒸気を作るんだ。大概無害だし、目くらましとかによく使うね、僕は」

ぱたぱたとアドラーが銀のトレーで風を起こした。

アリスティドが座っていたところに、確か4日前に街で出会ったあの人が居た。

「アリス君……あれ？ アリーさん？」

「覚えててくれたんだ！ 嬉しーなー！」

青年はにっこり笑って、細い指でティーカップを持ち上げた。

「えっと……魔法？」

「そ。そういうこと」

紅茶を一口飲んで、アリー、つまり青年姿のアリスティドは満足そうに頷いた。

おとうと。(後書き)

主人公は若干鈍感、まあ、よくあることです。アドラーさんが鳥かご蹴っ飛ばしちゃったのは、許して上げてください（＾▽＾）バツクチヨークは彼女なりの愛情表現です。

三兄弟

食堂という名の温室には、ガラス張りの天井から柔らかな午後の光が降り注ぐ。緑色の中に時折黄色やオレンジが混じる光が、ティーセットの上で揺れる。アドラーが窓を開けたようだ。

「じゃ、つづけてこの家の事も説明するね」

青年姿のアリスティドは、少年姿の時と変わらない様子で話しを続ける。

「僕らは一応全員魔法が使えるから、僕らの家は、魔法で自動制御されているんだ。使用人はアドラーひとりだけ。パートのおばさんもないよ」

パートのおばさん？

パートってなんだろう？ 何かの部分？

リアはよくわからないけど、とりあえず頷いておいた。きっと貴族の屋敷では、使用人が1人なんて、普通じゃないんだろうな、と思った。

「今いる住人は、僕、クロード、アドラー、リアちゃんと、あとあそこに縛り付けられてるギルバート。公的な記録によると、僕とクロードとギルバートは兄弟らしい」

「らしい……？」

アリスティドは持ち上げたティーカップを降ろした。

そういえば、という表情でリアの事を見た。

「リアちゃんは記憶がないんだっけ？ じゃあ、失われた30年のことも知らない？」

リアはまったく心当たりがなかったので、分からないです、と答ええた。

「レコードのことも知らない？」

「蓄音機の……」

「あーそれもレコードだけど、それじゃないレコードのことなんだ

よねー」

アリスティドは指先で頬を掻いた。

少しの間思案して、ゆっくりと喋り始めた。

「この王国には、独立系情報収集体と呼ばれる記録書がある。レコードは、唯一無二の公的な出来事の記録書で、複製は存在しない」
まるで教科書みたいだと、リアは思った。頷いて相づちを打つと、アリスティドは続けた。

「レコードには、国王とその縁者の身に起こった事が自動で記録される。僕は国宝級魔法使いの血縁、しかも直系だから、レコードには僕が生まれてから死ぬまでに、僕が起こした事、関わった事が記録される。他の大貴族も同様。だから、レコードには1年間に膨大な記録がなされるんだ。ところが」

アリスティドが一呼吸置いた。

リアも深く呼吸した。

「カルロス王齢歴683年の中頃から、713年の終わり頃まで……大体30年の間、記録がほとんどなされていない。そして、その30年間は他のあらゆる記録も、人々の記憶も、不完全なんだ」

「他の記憶も、記録も？」

「そう」

アリスティドは頷いた。

「例えば、納税記録、居住登録。毎年行われてるんだけど、どちらも白紙が大量に保管されていたんだ」

「白紙が……？」

「一部、記載があるものもあったから、もしかしたら間違えて保管用じゃないインクを使ったのかもしれない。ところが、民間の個人的な記録、例えば商店の取引記録とか日記とかね、そういうのも、その30年間だけほとんど存在していないんだ」

「それは変……じゃない？」

「だよ、普通そう思うよね。僕らは、何かの魔法かその影響なのかもしれないと考えてる。まあ、国有財産を私的流用とかするよう

なレベルの連中に、そんな大規模な魔法が使えるとは思ってなし、その必要も無いはずだけど。今のところ、詳しく分からないから公的記録の白紙は全てそのまま保管してあるんだ」

まったく場所をとって仕方ないんだよね、とアリスティドは唇を尖らせた。

「それで、話しは戻るけど、カルロス王齡歴715年前までの30年間、記録や記憶があやふやで何が起こったのかよく分からないんだよね。さてリアちゃん、僕は何年生まれでしょう？」

アリスティドが紅茶を飲んで、アイスボックスクッキーをつまみながら聞いてきた。

「今は、732年……で、アリス君は30くらいだから……702年生まれ？」

アリスティドは嬉しそうに頷いた。

「リアちゃん、暗算できるんだね」

「え？ あ、まあ……得意じゃないけど」

「僕も苦手ー暗算嫌いー」

そ、そうですか……。

リアは何とも言えないようがないので、紅茶を一口飲んだ。苦い。

「それで、えーと、僕らは失われた30年の最中に生まれた。だから、出生記録がなくて、父親や母親が不明確なんだ」

あれ？

記憶や記録が曖昧なら、どうやって兄弟だって分かったんだろう？

「両親が分からないってなると……」

「兄弟かどうか分からないよね。ただ僕らは幸いな事に、役所に提出された居住者届出が存在した。僕とクロードとギルが兄弟として申請されていたのが発見されたから、僕らは兄弟として暮しているんだよ」

アリスティドがクッキーに手を伸ばした。赤いジェリーが宝石のように煌めく、絞り出しタイプのクッキーだ。

「本当に、ひとりぼっちじゃなくて良かったよ」

降り注ぐ光にクッキーをかざして、アリスティドは小さな声で呟いていた。

ひょいと口に入れたクッキーは噛めば軽い音がしたけれど、ジェリーだけがねっとり口の中に残った。アリスティドは紅茶でジェリーを押し流して、話しを続けた。

「レコードを含めた多くの記録が完全回復したのが715年。ネルソン王の時代で、714年の末日、ネルソン王の妻メルバが亡くなった年なんだ。メルバ王妃は子どもとともにこの屋敷に滞在中、亡くなった」

三兄弟（後書き）

絶妙に反発し合ってまとまってくれない3兄弟。わりと食べ物の出現率が高いのは、仕様です。

王子様

「メルバ王妃は子どもとともにこの屋敷に滞在中、亡くなった」

アリスティドの何気ない言葉に、リアは一瞬固まった。意味が分からず、言葉の意味を頭の中で確認しなおしていた。

「この、屋敷で……？」

アリスティドは頷いた。

「庭にあった離れが爆発して亡くなったそうだから、この建物の中で亡くなった訳じゃないよ。まあ、魔法に失敗して死んでしまう事って、複雑で煩雑な複合魔法じゃわりとよくあるんだけどね……。それで、メルバ王妃の筆跡で、僕とクロードが王妃の養子であること、僕ら3人が兄弟であることが書かれた書類が届出されてたから、僕らは兄弟として暮しているんだ」

アリスティドが紅茶を飲んだ。

「じゃあ、3人は王族なんですか！」

「まあね」

素っ気ない。僕にとってはどうでもいい、という雰囲気だ。

「重要なのはね、ギルがメルバ王妃の子どもだって事だよ。多分ギルの父親はネルソン王だね」

アリスティドが自分のカップに紅茶を注ぎ足し、飲んだ。

リアも紅茶に口を付けた。さっきより少し苦い。

「そう、だからギルは、ネルソン王の嫡子として王位継承権がある。これは現在、公に認められているんだ。僕とクロードにはないけどね」

リアは今一度黒尽くめのギルバートを見た。あれが、王様候補。

「っていうことは、王子様、ってことですよね」

結構イメージと違う。

王子様って、もうちょっとこう……紳士的な、貴公子然とした人だと思ってた。

リアは冷めた紅茶を飲み干した。アリスティドはリアのカップに紅茶を注ぎながら、話を続けた。

「そうなんだけど、王子様ってガラじゃないよねー。どちらかっていうとドラ息子とかの方が似合う気がするよねー」

「はい、全くだす」

リアは素直に頷いた。

「ただね、ギルは数年前に呪いを受けて、ほとんど魔力を封じられてしまったんだ。それまでは国のあらゆる事を知りたいって言って、色々な事を勉強してた。視察に行ったり、討論会を開いたり、色々頑張ってたのに……」

少し悲しそうな表情をするアリスティドを、リアは不思議に思った。

「魔力を封じられると、何かあるんですか。魔法を使わなくても、暮している人は大勢いますけど……」

「この国の王様の第一の仕事って何だと思う？」

リアは目を泳がせた。ピンと来ない。

「国民が飢えないようにする事？」

「それも大切。もっと大切なのは、この国にはられた結界を維持する事。結界がなければ、僕らは外界の瘴気にあてられて瞬く間に死んでしまう。結界の維持ができるからこそ、王様は王様と呼ばれて、国民から大事にされるんだ」

アリスティドはココアクッキーに手を伸ばした。

「結界の維持には、王家直系の魔力が必要なんだ」

「じゃあ、魔力が封じられたままだと……」

「王様にはなれない」

「……」

「今は、ネルソン王の弟のブライアン陛下が頑張ってる。だけど、彼はもともと体が弱くて魔力が少ない上、50歳も越えたはずだ。その次の世代は、病死や事故が相次いで、あとはギルしかない」
アリスティドはクッキーをかじった。紅茶を飲んで、一息つく。

「ギルが王様になりたいって言うなら、僕は呪いを解く努力をするよ」

「でまかせ言うなよ」

ギルバートが肩で息をしながら、アリスティドを睨みつけていた。
「信用できるか、こんな奴」

そう言って、ギロリとリアの方を見た。

「さっきの魔鳥を早く寄越せ！」

リアは何も言わなかった。

よくわからないけれど、可哀想な気がした。

リアの肩に、ピピが止まった。

「ピピ、契約済、モウ、魔力ナ―イヨ？」

ギルバートは悔しげに歯を食いしばった。

「くそっ」

「リアちゃんの鳥？」

アリスティドがピピを見ながら尋ねてきた。

「村でお世話になっていたおばあさんが飼っていたの。ピピは村の人とはちっとも仲良くしなかったんだけど」

「へえ、そうなんだ。ピピは人の言葉がわかるんだ？」

アリスティドが言うのと、ピピはリアの肩の上で足を踏み替えた。

「モチロン、ピピ、天才」

「僕、アリスティド。よろしくね」

「ピピ、ピネルピネラ！ ヨロシク、ネッ！」

ピピはテーブルの上に舞い降りると、アイスボックスクッキーをくわえて飛び去った。アリスティドはピピを見送ってリアを見た。

「ピネルピネラを飼うなんて、すごいおばあさんだったんだね。魔女？」

「魔法は使ってなかったから、そこまではちよつと」

「会ってみたかったなあ」

ほおづえをついてココナツクッキーをつまんだアリスティドが、独り言のように呟いた。

「新しい飛行艇作ったんだろ。それに乗って会いに行けばいいじゃん」

ギルバートが、縄をほどこうともがきながら言った。

リアは、会いに行けたらすごくうれしいな、と思った。

アリスティドは、こいつは知らないんだったつけ、と気付いた。

アドラーが、ギルバートのための昼食を持ってきた。

「僕の飛行艇も万能じゃないからね。さすがに亡くなった人に会いに行く事はできないよ」

縄をほどいて、ずかずかと席について、ゴブレットのオレンジジュースを飲み干し、サンドウィッチにかぶりつきながら、ギルバートは平然と言い放った。

「じゃあ、時をさかのぼって見るだけ見てくればいいじゃん。過去を変えなければ、過去に行ったらって平気なんだろ？」

アリスティドが腕組みした。

「ギル、君、分かってるよね？ 時を越える魔法はリスクが大きいんだよ」

「知ってる」

ももごとくパストラミサンドを頬張りながらギルバートが返した。「知ってるなら、軽々しく言うべきじゃないでしょ」

「可能性のある選択肢を頭から否定するよりマシ。アドラー、オレンジジュース」

山盛りのサンドウィッチをがつがつと食べながら、しれっとした表情でギルバートが言う。アドラーがじゃばじゃばと荒っぽくオレンジジュースを注いだ。

「汚えー」

「汚いって言うのは、貴方みたいな異臭を放つ存在に対して使うものです。それ食べたらお風呂に入ってくださいよっ！」

アドラーが口を尖らせると、ギルバートは自分のローブの臭いをかいだ。そして、黙ってパストラミサンドにかぶりついたのだった。

王子様（後書き）

S I C 第1章、読んでいただきありがとうございます。

お待たせしました、ようやく少年と少女が出会いました。

ちなみにこの世界の入浴方法で、湯船につかるのはメジャーです。

首都から見て東北の方向にある山の麓に、地獄極楽温泉という温泉郷があります。

あははうふふ（？）な温泉話は、そのうちに。

林檎のタルト

翌日の夕方、甘い匂いが食堂を包んでいた。

アドラーが楽しそうにティーセットを運び、リアはエプロンを外して自分の“作品”を眺めていた。

「いいにおいー」

7歳児姿のアリスティドがとことこ、とテーブルに駆け寄り、椅子の上に立って、目を輝かせた。

「美味しそう!!」

「林檎か」

呟きながら、クロードも食堂へ入ってきた。今日は一段と前髪が整っている気がする。

「おばあさんのレシピで、林檎のタルトを作ってみました。村から林檎が届いたので」

「美味そうだ」

クロードはテーブルに近づくと、林檎のタルトを見つめていた。

「なあ、それ今食べるの？」

ぎよっとして、全員が振り返った。

そこには、ギルバートが、昨日とは随分違う姿で立っていた。髪の毛はべた付いていないし、ざっくりとはあるけれど金髪を後ろで結んでいる。それに、白いシャツに黒いパンツという、クロードと同じような服装。いくらかサイズが大きいようにもみえるけれど、まるで、若手の楽団員か休憩中のホテルのボーイのような雰囲気だ。「これから食べるつもり。アドラーさんがお茶の準備してくれたから」

リアが答えると、ギルバートは席次でいう4番目の席に座った。アリスティドが驚きに驚きを重ねた様子で、ゆっくりと椅子に座った。クロードも興味深そうに林檎のタルトとギルバートを交互に見て、席に座った。リアが席に着くと、アドラーは「テーブルが大き

すぎますから形式は置いておきましょう」と言って、温めたティーポットに茶葉と湯を入れ、タルトを取り分け始めた。

「少しいだらうか」

クロードが皆を見渡して言った。

「こんなときに申し訳ない話なんだが、先ほど、団長から連絡があって、早急にあちらへ向かう事になった」

よく分かっていない様子のリアを見て、アリスティドが説明してくれた。

「クロードは、王宮医師団のうちの一人なんだ。王族の血とクロードの魔力は相性がいいらしいから、招集されたら行かなきゃ行けないんだよ」

「すごい！ 王宮医師団ってことは、王様の病気を診るんですか？」

「王様も診るし、妃や王子、姫も診るらしいよ」

「叔父貴の体調が悪いなら、王宮に常駐してる連中で間に合うだろう」
金色のフォークを弄びながらギルバートが言うと、クロードはかぶりを振った。

「ブライアン陛下はお元気だそうだ。体調が芳しくないのは、王妃のジュディト様だ」

「お腹が随分目立つようになったらしいねー」

アリスティドは取り分けられた林檎のタルトを凝視している。

「兄さんのところにも噂は入っていると思いますが」

「まあねー。次こそ王子だって皆意気込んでるみたいだねー。娘3人のジュディト様にとっては重圧だよねー」

「だからこそ早めにクラウンへ行きたいと思います。リア以外の今の患者の預け先も見つかったので、自分は今晚にもイストベルクを経ちます。兄さん達はどうしますか」

アリスティドは注がれた紅茶を飲むうとして、止めた。少し間をおいて、紅茶を一口飲んだ。

「うん。じゃあ、全員、今晚のうちにイストベルクを出発しよう。ぼくもそろそろ顔出さなきゃだし、リアちゃんを魔法学院のレゼン

先生に会わせてみたいし」

落ち着かなくてごめんねー、とアリスティドはリアに謝った。けれど、リアはむしろ、自分も一緒に首都クラウンへ行けるのが嬉しかった。やっぱり、首都という場所は特別だ。

「魔法学院って、魔法を教わる学校ですか？」

「魔法もだけど、その他にも色々ね。強い力を行使する者は同じ位大きな社会的責任を負うべきっていう、考えらしいよ。それよりさあ、リアちゃん、食べていい？」

アリスティドが、上目遣いにリアを見た。金色のフォークで、林檎のタルトを指し示している。

「ど、どうぞどうぞ！」

「やったあ！」

満面の笑みで、タルトを口に運ぶ。ギルバートも、待ってましたと言わんばかりの早さで食べ始め、クロードもほっとしたような表情でゆっくりとフォークを動かしていた。

「美味しい！ シナモンが入ってるんだねー」

「林檎を煮た後に結構入れました」

リアも一口食べてみた。シナモンの香りと林檎と蜂蜜の甘さが広がる。

「俺はシュトロイゼルより、カシューかクルミが乗ってる方が良い。カラメリゼしたやつ」

と、ギルバートが、林檎のプリザーブの上に散らしたそばろ状のクッキーだけをすくい上げて言ってきた。

「ナッツ……レシピには書いてあったけど、ちょうどストックを切らしてたから、代わりにシュトロイゼルを乗っけてみたの」

「……じゃあ、ないなら、仕方ない」

ギルバートは再びタルトを食べ始めた。

実は、タルトの材料を集めている時、食料庫のナッツ類のストックケースだけが空っぽだったのだ。そのときのアドラーの様子を思い出して、リアはピンと来た。

あの時、アドラーは「まったく、もう！」と言っただけで、騒いだりしなかった。普通なら鼠の仕業かしら、とか言っただけで他の食品も点検したりするのだ。皆の様子からして、ギルバートは皆と一緒に食事をしないのが普通。ナッツ類が空だったのは、きっとギルバートがこっそり食べきってしまったためで、アドラーはそれに気付いて、鼠かも、盗人かも、と騒いだりしなかったのだ。

すっきりしたと同時に、奥深い人たちだ、とリアは思った。

「リア、このレシピは村で一緒に暮らしていたおばあさんから送られてきたものなのか？」

クロードが半分程タルトを食べたところで尋ねてきた。

「はい。ちょうど村から届いた林檎があったので、せっかくだから思っ作って作ってみたんです」

「そうか」

紅茶を飲んで、クロードはひとつ頷いた。

「不思議だな。懐かしい味だ」

リアは少し嬉しくなって、少し寂しくなった。

おばあさんともっと色々話したかった。

おばあさんの林檎のタルトを食べてみたかった。

そしたらきつと、作るタルトの味も、おばあさんの味に近くなっただろうな。

林檎のタルトをすっかり食べきって、各人荷造りをする事になった。リアはあつという間に終わったので、アドラーの代わりにティーセットを片付けていたのだが、ふと、林檎のプリザーブを思い出した。林檎のタルトを作る時に、少し多めに作っておいたのだ。リアは林檎のプリザーブを琺瑯の容器に入れて蓋をした。また明日、みんなでこの林檎を食べたいな。

蓋をしてから、ギルバートの事が思い浮かんだ。

あの人、アリスティドさんやクロードさんとあんまり仲が良い感じじゃなかったけど、一緒に飛行艇に乗ってクラウンまでいくんだ

よね？ 一人だけここに残るとか、言わない……よね？

日も暮れた頃。

リアはアドラーに案内されて、裏庭へ回った。木や草や花の多く植えてある普通の庭と違い、裏庭はほとんど地面がむき出しで、所々芝生が生えているだけだった。その真ん中に、細長い卵に脚が生えたような飛行艇が鎮座しており、四方八方へ光を放っていた。

飛行艇に乗り込んだ時、ギルバートを見つけてリアは思わず頬が緩んでいた。手持ち無沙汰な様子で歩き回っていたギルバートは、リアをちらっと見て、そのまま操縦室へ入っていった。

今回の飛行艇は以前乗ったものより大きい。リアはイスに腰掛けると、琺瑯の容器を抱えて目を閉じた。

どうか、みんな無事に仲良くクラウンまで行けますように。

林檎のタルト（後書き）

シュトロイゼル…そぼろ状クッキー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4492x/>

S.I.C. -the System of Isolation for C.

2011年11月4日08時13分発行